

第1回 私の研究三段跳び



若気の至りで、進学先は苦手な経済学部を選んでしまったことから話は始まります。おまけに、卒業後の就職が頭をよぎる頃になって初めて、男と給料が同じ就職先は女にはほとんどないことに気づきました。この時点で、本来やりたかった生物学に再挑戦しようと決断。しかし、生物学もオーバードクターで就職難と聞き、クイッパグレの無い医学部に進路変更を決定！家庭教師をしていた高校3年生と一緒に受験勉強をしました。

当時、夫1人。三段跳びの「ホップ」は、医学部の基礎配属と同じ趣旨の課目（以下「基礎配属」とします）で研究現場を垣間見たことです。「基礎配属」は免疫学も紹介していた生化学講座を選びました。実際にはそこで研究をしていた肝臓内科の先生の研究を手伝いました。「肝臓は代謝臓器である」という側面が蔓延する中、反旗を翻しながら肝臓の免疫細胞であるクッパー細胞に照準を合わせた先生の研究を手伝いました。面白かった。「基礎配属」の期間が終了しても、放課後や夏休みに研究を続けました。実験だけではなく、論文書き（日本語）も手伝いました。この時すでに2人の子持ち。医学部卒業後は、「基礎配属」の縁で生化学の大学院に進み、同時に肝臓内科で臨床の研修を受けました。重症当直と研究でへろへろになりながら、学位を取りました。

「ステップ」は家族（子供4人と夫1人）と一緒に過ごした米国留学とそこで出会った免疫学の面白さです。留学先の免疫学の先導者たちとセミナーで講演する免疫学の大家たちに出会い、彼らの柔軟な考え方、そして、実験結果を基に一見突拍子もない仮説を難なく立ちあげる姿に驚きました。こうして、免疫学の面白さに魅了されてしまったのでした。ワクワクドキドキ。子供たちが通った米国の保育所や小学校の素晴らしさも、この時知りました。帰国後、エイヤッと足場を基礎研究に転換しました。学位のテーマだった劇症肝炎の研究を再度掘り下げようと、モデルマウスを用いた解析を再開しました。同じモデルマウスを使ってショックの研究をしていたのが、兵庫医大の岡村春樹先生でした。こうして、岡村先生が発見したインターロイキン(IL) 18に遭遇したのでした。

「ジャンプ」は、このモデルマウスが取り持つ縁の延長線上で迎えた兵庫医大への転任です。IL-18は研究が始まったばかりです。世界的にもあまり知られていませんでした。言い換えれば、競争相手の比較的小さい研究領域でした。実際、何をやっても、「新規」と冠される研究論文になりました。周りの多くの研究者や大学院生と一緒に、思いっきり、やりたい放題、IL-18の研究をしました。弾けました。そして、無事定年退職を迎え、今のわたしに至ります。少し大人になりました（ホンマか？）。

